

修士論文（要旨）

2017年1月

大学生の「甘え」が親密な人との関係に与える影響

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

215J4012

日根 栞

Master's Thesis(Abstract)

January 2017

The Effect of University Students' Amae on Close Relationships

Shiori Hine

215J4012

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目 次

I. はじめに	1
II. 目的と意義	1
III. 方法と手順	1
IV. 結果	2
V. 考察	2
引用文献	

I. はじめに

「甘え」は、親密な対人関係を築く上で重要な役割を果たす。土居（2001）は、「甘え」には「健康で素直な甘え」と「自己愛的で屈折した甘え」の2種類があると指摘し、誰かと一緒にいて居心地が良い場合は、「健康で素直な甘え」が満たされている状態であると述べている。反対に居心地が悪い場合は、「健康で素直な甘え」が満たされていない状態であり、代わりに「自己愛的で屈折した甘え」という形で甘えを表出してしまい、そのことで悩むことも少なくないという。実際、「健康で素直な甘え」が良好な友人関係につながること（玉瀬・富平，2007）や、「自己愛的で屈折した甘え」が親密性の低さにつながるということ（浅原・山口・井上，2016）が、実証研究によって見出されている。

しかし、既存研究では自分の「甘え」しか考慮に入れておらず、自分の「甘え」と相手の「甘え」の組み合わせに着目し、その組み合わせが両者の関係に与える影響を検討した研究は、著者の知る限り存在しない。そこで、本研究は、自分の「甘え」と相手の「甘え」の組み合わせに着目し、実際にどのような組み合わせが存在するのかを明らかにした上で、「甘え」の違いにより、相手に対する愛情の程度にどのような違いがあるのかを検討する。

II. 目的と意義

本研究では、青年期にある大学生を対象とし、自分の「甘え」と親密な相手の「甘え」の組み合わせに着目し、その組み合わせが相手に対する愛情の程度に与える影響を検討することを目的とする。自分と相手の「甘え」の組み合わせの違いにより、相手に対する愛情の程度にどのような違いがあるのかを明らかにすることで、友人や恋人との対人関係に悩む大学生へのカウンセリング等に有益な示唆を与える一助となると考える。

III. 方法と手順

調査は都内私立 A 大学に在籍する大学生男女を対象とし、質問紙調査を実施した。629 部の質問紙を配布し、536 部を回収した（回収率 85.2%）。有効回答は 419 部（有効回答率 78.2%，平均年齢 20.0 歳（標準偏差 1.13），男性 159 名，女性は 260 名）であった。

質問紙の内容は①対象者に関する質問項目（年齢，性別，学年），②自分の「甘え」の測定尺度（多元的「甘え」尺度（玉瀬・相原，2004）より抜粋），③想定した家族以外で最も親しい人物（以降相手と表記）に関する質問項目（年齢，性別，交際期間，相手との関係），④相手の「甘え」の測定尺度（②と同様），⑤愛情の三角理論尺度（TLS27（金政・大坊，2003）より抜粋）であった。

分析方法は、SPSS ver23.0 を用いて、「甘え」と愛情の各因子間の関連を検討するため、相関分析を行った。次に、対象者の性別と、相手が同性であるか異性であるかによる「甘え」と愛情の差について検討するため、対象者の性別と相手の性別を独立変数、「甘え」と愛情の各因子を従属変数とした 2×2 の分散分析を行った。次に、交際期間による「甘え」と愛情の差について検討するため、交際期間（短期群，中期群，長期群）を独立変数、「甘え」と愛情の各因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。次に、どのような「甘え」の組み合わせが存在するのかを群分けするため、「甘え」の下位尺度得点を用いて、Ward 法によるクラスタ分析を行った後、各クラスタの特徴をみるため、各クラスタを独立変数、「甘え」の各因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。さらに、対象者

の性別と、相手が同性か異性かによる各クラスタの分布の差について検討するため、クロス集計表を作成し、 χ^2 検定を行った。最後に、「甘え」の組み合わせによる、愛情の差について検討するため、各クラスタを独立変数、愛情の各因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。

IV. 結果

相関分析の結果、自分・相手の「甘え」の関連については、自分の「甘え希求」と相手の「甘え希求」の間に弱い正の相関、自分の「甘え受容」と相手の「甘え受容」の間に中等度の正の相関、相手の「甘え希求」と相手の「甘え受容」の間に弱い正の相関が示された。「親密性」と「コミットメント」の関連については、両者の間に強い正の相関が示された。「甘え」と「親密性」・「コミットメント」の関連については、相手の「甘え受容」と「親密性」、相手の「甘え受容」と「コミットメント」の間に弱い正の相関が示された。次に、対象者の性別と相手の性別による相違については、 2×2 の分散分析の結果、男性×同性の場合の方が、その他の場合よりも、自分・相手の「甘え受容」得点が低く、対象者が男性の場合よりも、女性の場合の方が「親密性」得点が高く、相手が同性である場合よりも、異性である場合の方が、「コミットメント」得点が高いことが示された。次に、交際期間による相違については、一元配置の分散分析の結果、相手の「甘え受容」のみ、長期群よりも短期群の方が高いことが示された。次に、クラスタ分析を行った結果、3つのクラスタが得られ、それぞれを「受容高ペア群」、「甘え低ペア群」、「希求高ペア群」と命名した。さらに、 χ^2 検定の結果、男性×同性のグループでは、他のグループよりも「受容高ペア群」が少なく、「甘え低ペア群」が多いことが示された。さらに、一元配置の分散分析と多重比較検定の結果、「甘え低ペア群」、「希求高ペア群」よりも、「受容高ペア群」の方が、「親密性」得点が高く、「甘え低ペア群」よりも、「受容高ペア群」の方が、「コミットメント」得点が高いことが示された。

V. 考察

本研究の結果、自分と相手の「甘え」の組み合わせは、「受容高ペア群」・「甘え低ペア群」・「希求高ペア群」の3群に分類することができ、そのうち「甘え受容」が最も高い「受容高ペア群」が、対人関係においてより適応的であることが示唆された。このように、自分の「甘え」のみでなく、自分の「甘え」と相手の「甘え」の組み合わせに着目した既存研究はなく、その点に本研究の学術的意義があるといえよう。

さらに、本研究の結果から、対人関係をより親密なものへと発展させ、維持するためには、特に「甘え受容」が重要であるということ、自分の「甘え受容」が高い人は、相手の「甘え受容」も高いと認知するということが明らかになった。これらの結果の1つの解釈として、一方が相手の「甘え」を受容することで、もう一方も相手の「甘え」を受容するようになり、その結果、両者の「親密性」や「コミットメント」が高まる可能性が考えられる。したがって、本研究の臨床的応用の可能性として、友人や恋人との対人関係に悩む大学生に対するカウンセリングにおいて、自分の甘えが満たされているかどうかという視点から一歩引いて、自分が相手の甘えを受け入れることができているかどうかという視点を持てるよう支援していくことが挙げられるであろう。

引用文献

- 浅原千鶴・山口一・井上直子（2016）．青年期の甘えの諸相——親密性と個人志向性の否定的側面—— 桜美林大学心理学研究，6，1－17．
- 土居健郎（2001）．続「甘え」の構造 弘文堂
- 金政祐司・大坊郁夫（2003）．愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究，10(1)，11－24．
- 玉瀬耕治・相原和雄（2004）．大学生の「甘え」と特性5因子との関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要，13，23－31．
- 玉瀬耕治・富平美智子（2007）．大学生の「甘え」と友人関係 帝塚山大学心理福祉学部紀要，3，59－72．